

---

# あなたはわたしのモノ

ゆきりいな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたはあたしのモノ

### 【Zコード】

Z7401P

### 【作者名】

ゆきりいな

### 【あらすじ】

お互いの事はまだ知らないありますと囁く。

依織や柚羽達と甘い様で苦い学園ラブコメディーが今、この場所で始まる。

このお話は実話を元にしていますが、一部、フィクションがあります。

## すべての始まり（前書き）

第七大阪中学校 吹奏楽部 登場人物

瀬田 ありす（せだ ありす）中1。4月16日生まれ。クラリネット担当。

あだ名 ありす、瀬田、ありちゃん、せつちゃん

仲川 晶（なかがわ しづか）中1。9月28日生まれ。トロンボーン担当。

あだ名 晶、仲川、晶やん、仲やん

戸川 依織（とがわ いおり）中1。5月5日生まれ。アルトサックス担当。

あだ名 依織、戸川、いおりん、とがわっち

## すべての始まり

あたしは、瀬田あります。

恋している中1。

幸せいっぱいのはずなのに・・・

どうしてなのかな？

こんなにも苦しまなきゃいけないのかな？

どうすれば、あの人と仲良くできるのかな？

ご飯も食べれるのかな？

ふざけあえるのかな？

喋れるのかな？

もう胸が張り裂けそくなくらいがんばったよ。  
でもでも。

あなたは、答えてくれない。

じゃあ、あたしはどうすればいいの？

もう何がなんだか分かんなこよ。

ねえねえ、

教えてよ。

あなたの気持ち。

あなたの心の中がしりたいよ。

## すべての始まり（後書き）

さて、これからどうなってこられるのでしょうか？

次回もお楽しみに！

## 2つの出来事「1話」

遡る（さかのぼる）事1年前。

ありすは入学をした。同じように、晶も入学をした。  
第七大阪中学校の入学式。

ありすは、その時、晶の存在なんてこれっぽっちも知らなかつた。  
時がすぎ、やがて、部活動の仮入部の期間になつた。  
ありすは、音楽が好きで吹奏楽部に入ろうと決めていた。  
また、晶もピアノを習つていて、音楽が好きだつた。

時が経つのも早く、仮入部が終わり、本格的に入部をする事になつた。

もちろん2人とも吹奏楽部に入部する。もう、入部届けも出した。

次の日。ありす、晶は正式に入部をした。

そして、初めての部活。

「こんにちは～！」

部長の挨拶に1年は戸惑つ。

「…こんにちは

「出席取ります！」

次々に名前が呼ばれていく。

「瀬田さん」

「はつ…はい」

あいすは少し不安そうに返事をした。

全員の出席が終わり、自己紹介の時間になつた。

「私は部長の兼田憂奈です！憂先輩つて呼んでね」

「副部長の寺沢妃果梨です。妃果梨さんつて呼んで下さい。」

「同じく副部長の相澤琉子です」

「じゃあ、1年生自己紹介しようつか。」

「部長の憂奈がありすを指差した。

「はい！瀬田ありすです。クラリネットをやりたいと思つてます。」

その瞬間。

「おおーー」と奇声が聞こえた。多分、クラリネットの先輩方だろうとあいすは思つた。

時が経ち、すべての自己紹介が終わつた。

「じゃあ、今から楽器を決めるオーディションをします！」

「先生呼んでくるから待つてて」

5分経つて、先生が3人やつてきた。

「知つてると思つけどこの先生が音楽の先生で吹奏楽部顧問の戸根ゆり先生」

「この先生が指揮を振つて下さつてる伊丹祐也先生」

「吹奏楽部副顧問の堀雅信先生」

「この先生方に審査をしていただきます！」あいすはクラリネットになれるのか心配になつた。

～の意味で「一語」（後書き）

あつすはクラリネットになれるのでしょうか。  
これからどんな部活になつてこへのか楽しみにしてください

ありすはクラリネットを3人の先生の前で吹いてみた。

いつも、吹いてもあまりいい音は鳴らないが、今、吹いてみると意外と音が鳴る。ありすは本番に強いタイプなんだと本気で思った。

「はい。ありがとうございます。」ゆりがそう言つ。

「ありがとうございました！」ありすもゆりにつられて言つ。

次は、トロンボーンの番だった。

晶はトロンボーンが吹きたかった。

「よのしくお願ひします」晶が言つ。

「どうぞ。」ゆりが答える。

いい音が音楽室に響いた。

「はい。いいよ。」ゆりが答える。

「ありがとうございます…」

晶的にはあまりいい音ではなかつたようだ。

「全員のオーディションが終わつたので、ここで昼休みにしたいと思つます」ゆりが疲れたようなオーラを出しながら、そう言つた。

昼休み。

「あつあ～！」

そう呼んできたのは、1年1組で、第七大阪中学校に入つて最初に友達になつた柚羽だつた。

「柚羽～！どうしたん？」

「クラリネットどうやつた？」

「まあ、なんとか…柚羽はサックスどうなん？」

「ヤバい。無理かも…こうなつたらパークッションを狙う。でもパー

ーカッションもヤバかつたんよ…」

「マジ…？ヤバいやん…どうする…！？」

そういうしてこるうちに、オーディションの結果発表が始まつた。

## 2つの由来で「2話」（後書き）

さて、あいすはクラリネットになれるのでしょうか？  
また、柚羽も念願のサックスになれるのでしょうか？それとも、折  
れて、パークッシュョンになるのでしょうか？

## 長旅の始まり

「フルート、田中。以上。」いよいよ結果発表が始まった。

「クラリネット…」

「小川、緒田、瀬田。以上。」

ありすは念願のクラリネットになれた。

「サックス…」

「戸川、真樹、弥生。以上。」

柚羽はサックスにはなれなかつた。

「トランペット、鯉田。以上。」

「トロンボーン…」

「仲川。以上。」

晶もトロンボーンになれたようだ。

「ホルン、夜灘。以上。」

「ユーフォニウム、穂村。以上。」

「チューバ、詩群。以上。」

「パークッシュョン…」「香栄。以上。」

やはり、柚羽はパークッシュョンになつた。

「これから、辛い事もあるかも知れんけど、頑張つてね。では、今から決まったパートに分かれて、練習して下さい。」

「はい！」

1年全員が声を揃えて返事をする。

これから、第七大阪中学校吹奏楽部1年の長い旅が始まる。

## 長旅の始まり（後書き）

ありす、晶は念願のパートになれましたが、柚羽はなれませんでした。  
一体、これからどんな事が待ち受けているのでしょうか？

「じゃあ、ベー、吹ける人。」

今日は、1年だけで初めての合奏。裕也が言つ。

晶がゆっくり、自身ありげに手を挙げた。

「お、名前は？」

「仲川晶です。」

「仲川か。じゃあ、ベー吹いてみて。」

晶が吹いた瞬間、ありすは、「なんて綺麗なベーなの。きっと、心が綺麗だからなんだろうなあ」

そう思つた。

そして、恋をした。

次の日

「仲川。ちよつときててくれへん？」

「うん」

晶は「ここ、誰やね？」と思いながら、いつたら、

「いきなり『めん。誰かわからんよな。あたしは瀬田ありす。よろしくね！』で、プロフ書いてくれへん？」

第七大阪中学校吹奏楽部は、プロフ（一）を書くことがブームだつた。

「先輩からも3・4枚もらつていたから、一枚位もらつたつて、あまり変わらないだろう」と思つていた晶は、「分かった。ちょーだ

い」といつて、受け取った。

## 恋する魔晄（後書き）

（一）「プロフ」とは?  
プロフとは、「プロファイル帳」の略。  
あつすは魔晄にプロフを渡せました。  
さて、これからどんな恋が始まるのでしょうか？

## あたしの秘密

今日は、あたし・・・いいや。瀬田ありすの秘密を教えます。

あたし、瀬田ありすは、つい最近、仲川晶くんといつ子に恋をしました。

仲川くんは、綺麗なベーを吹ける超カツコイイ男の子です。  
まあ、みんなは、カツコイイなんてこれっぽっちも思つたことないかも  
しれないけど、あたしにとっては、カツコイイ。

みんな、仲川くんをいじつって、ただ単におもしろい奴つて思つて  
るかもしない。

けど、そんなじられてるあなたを見て、「カツコイイつて誰も思  
わないのかなあ」

つてそう思つ。

もし、あたしがあなたの事、好きつて誰にバレても、ずっとずっとと  
好きでいたい。

それがあたし、瀬田ありすの本心。  
最後に。

「ここの思い、届かないかもしないけど・・・  
「大好きです。」

## あたしの秘密（後書き）

「最後に。」とか言っていますが、最終話ではないですよーー（笑）  
次話、いよいよ苦しい恋のバトルがはじまるかも・・・

## 何も知らない世界【一話】

晶は今日もルンルンで入学してはじめてできた偽将と学校へ行つた。すると突然…

「おはよう」

と可愛くも頼もしい晶の好みな感じの声がした。とつあえずおはようと言われたので、

「おはよ」

と返した。

するとその女の子は、「あつー！紹介まだやつたんやんな」と言い、紙に何か書き出した。そこには、

「名前…戸川依織 誕生日…5月5日 あだ名…依織、戸川、いおりん、とがわっち ーーー これからもよろしくね」と書いてあつた。

「あなたは…なかがわ…くんやんな？」

「なんで知ってるん？」

「だつて…」と言い、名札を指差した。

「あ…！」晶は気付いたようだ。

「つてか、鯉田は？」偽将は、空氣の読める奴でもう教室に入つていた。

「ん？まあ、とにかくよろしくついでこまーーー」

依織は笑いながら教室に入つて行つた。

「面白くてしつこくなさそうやし、いい奴やなあ」

晶はそう思つた。

## 何も知らない世界【一話】（後編）

わあー、次はどーなるんでしょうか？

次回もお楽しみに

## 何も知らない世界【2話】

晶は最近、依織に少し好意を持ち始めた。

晶は気が付けば依織ばっかり見ていた。と言つても、席は前後なのだが。

「それにしても、この席は周りがいいなあ。

最初に友達になつた鯉田が斜め前で、戸川の親友の香栄が隣で、俺の…戸川」

なんて浮かれ過ぎてる晶なんだ。作者までアホらしくなつてゐる。自分で書いてるくせにな。

まあまあ…話を戻して。

ついつい顔がにやける。

そんな浮かれている時。

「仲川（ちゆうがわ）？ お（お）い」

数学の村内先生が声をかける。

そう。今は授業中なのだ。

「お前、超にやけてるぞー好き人の事考えてたんか！」

ドジッと笑いが起つた。晶は依織も笑つてるので、「しまつた…」と思つた。

「じゃあ、代わりに…戸川。この問題やつてくれ。」

「はい」

そう言い、スラスラと意味の解らない（わからない）問題を解いた。

「おー…さすが戸川！ 正解！」

晶は、

「戸川つてやっぱ凄い子やつたんやあ

そう関心した。

## 何も知らない世界【2話】（後編）

意味の解らなーの「解らなー」は、わざわざやつてあるので、決して、ゆきりんじがバカな訳じやないですよ  
作者の本音が本文に出ましたが気にしないでトモー（：・）

「こむりん~!」「授業終わりに柚羽が声をかける。

「どうしたん? むずは」

「いやいやあ」

「何?」

「仲川つておもひやつやこ~どつなんどうなん~」

「はあ? 何がやねん?」

「んも一分かつてないなあ~どつ思つてるとよ

「それはどういう意味ですか? 柚羽さん?」 依織は大して柚羽をさん呼びしての訳じやないが、そつこつときはさんを付けるのが依織だ。

「そういう意味です。」

「別にフツーやろ」

「マジでやう思つてるん?」

「はい。」

「それにしても、仲川の話したらにやけてるどつ~! じのじのま~!」

「まつ~マジでつ~」「ええ。つつか動搖してるやん~おもひ~!」

依織は「そんな事ない」と言い張るが、柚羽は勘が冴えているから、依織も晶も互いに気にしあつて居るのは分かつていた。

樂しこひととき（後書き）

依織よ～！

気付いてくれ～！

実は鈍感な依織ちゃんでした

次回もお楽しみに^ ^

## あたしへの眞実

「なあなあ、ありす！良いこと教えたろか？」

「なあーんか嫌な予感するけど…教えて」

「あんなあー依織つてなーもしかしたら仲川の事好・き・か・も知れんでー！」

「もー柚羽つたら冗談言わんといでえやあ」「いやいやーうちがあ、外した事、あるか？」

「うつ…それは…」

確かに、入学式の次の日、柚羽は見事な推理力でコンビニ強盗の犯人を見つけ出し、逮捕させて、警察から感謝状をもらつた事があるくらい凄いのだ。

「じゃあ、信じるわ。」

「依織は同じクラスやし、席、前後やから、告る可能性けつこうあるけど、ありすはクラス違うし、唯一の助けが部活…かあ…うちは正直、どっちの味方でもないから、応援しかできんけど…それでも頑張つてみる？」

「そりや初めて本気で好きになつた人やもん。頑張るよ！」

「そいやでーそれぐらいの覚悟でやらんとつー」

柚羽は本当に依織が勝つてしまつと思つていたが、それでも、「ありすには頑張つてほしい」という気持ちがあつた為、そう言つ事にした。

## あたしへの真実（後書き）

ありすに依織が仲川の事を好きな事を知られちゃいましたねえ…  
これからどうなるのか?  
お楽しみに^ ^

## 恋のテストと勉強のテスト「一話」（前書き）

穂村 実南子

中1。わりかし、キレ症。少し、標準語を交えて喋るのが特徴的。

## 恋のテストと勉強のテスト【1話】

「うわああーどーしょーつー」ありすには最悪の出来事が起つた様だ。

「どうした？」

佳莉那がありすに不思議な顔で聞く。

「テ～ストつつ！」

実南子が叫ぶ

うれああり言わんとしてえええり

「アヘンアヘン」

「ハナモヤハノレタシ…」

アーティストのアーティスティックな表現

「井」一組の二：

1 寺門日は数学。

「アーティスト」

「え、と…？この方程式を解け。…あああ、意味わからん！」

「実南子はどうやつた？」

「意外にできたよー！ありすは？」

「全然無理……」

「あらーーーでも、次があるわーーー。」

慰めあいながら、テスエは終わつた。

## 恋のテストと勉強のテスト「一話」（後書き）

さあ、勉強のテストは終わりましたが、恋のテストは終わってませんねえ……

どうなるんでしょうか！？

次回もお楽しみに

## 恋のテストと勉強のテスト【2話】

「ああ～つい～すう～つ～…」「う～

「柚羽～？どした？」

「ど～しょ～お！」

「だから何？」

「明日、席替え～つ～」

「席替えが何？」

「いおりんと離れるう～つ～」

「いおりんと離れるだけでそんな風になるか？普通？」

柚羽は、大して依織と離れるのが嫌だった訳じゃないがそこから、晶を連想させようと目論んでいたのだった。

「だつて、あんたのしーい席ないぜ？いおりん、仲川、鯉ちゃん。

「ああ……なるほど。」

ありすは妙に納得してしまった。

「な～な～や～？」

「まあまあ…」

「じゃあ仲川に告つて！」

「はああ？何で？」

「いやあ～おもろいやん！」

「あつそつ。分かつたよ～やればいいんでしょ

「うんうん～があ～んば～！」

ありすは柚羽の無理矢理な発言により、告白をする事になった。

## 恋のテストと勉強のテスト「2話」（後書き）

あつすちやん皆頑張りますねえ　＾＾  
作者も楽しみです^ ^ 次回もお楽しみにーー。では～

## 決心の壁【一話】（前編）

弥生 やよい  
希唯 さゆ

中1。ちょっと、ヤシのことがわかるが、  
とてもいいよ。

## 決心の時【一話】

「今日は、ドリ（ ー ）な柚羽がお送り致します！ テヘッ 」 「 テヘッ つて… おいおい…

「あります、私、柚羽の説得により、晶（あんま晶、晶呼びたくないんだけど、仲川つて呼んだら分からない人いるかもしないからどう呼びますね）告白する事になりました。」

「う～ん… ドリじょつかなあ」

「何が？」

ありすが悩んでいるところに希唯きゆが来た。

「いや、ちょっとね… 」

「そのちょっとを教えてよ～」

「どーしても言わなきゃダメ？」

「いや… そう言われたらしつでもないけど… や… や… や…

「じゃあ言わん！」

「あ～そ～。分かった。」

「希唯がいい子で良かつた… よし一メールで送るつと」

あつすは、告白の仕方をメールにすることに決めた。

## 決心の時【1話】（後書き）

次はどうなことが待ち構えているのでしょうか？

次回もお楽しみに^ ^

（ ー ） ドラ・・・とてもいじるのが好き。 反対語はダメ。 （ と ）

もいじられるのが好き。 ）

## 決心の時【2話】

「これでいいかな」

あつすはこんな内容にしようと考えた。

〔宛先〕仲川 晶

〔件名〕瀬田です^ ^

〔添付〕なし

〔本文〕瀬田です。あのさあ、質問やねんけど、仲川って好きな人居つたりする？（笑）こんな質問おかしいかも知れんけど答えてや！何でこんな質問すんねんって？

それは…

仲川が好きやからやで。（恥ずかしつー）返事聞かして。

瀬田 ありす

「こんなでいいかな…」

何か変な所があつたら大変だから念入りに調べるあります。

「よし。送る。」

そう思つたが、やはり告白には勇気がいる。

「ありますー！？」「飯ー！」「はーい」

「あ、今日の『飯ブログに載せよ』

ありすはブログをしていて、佳莉那や柚羽はこの事を知っていた。

「どうか、その2人もブログをしていた。

「よし。撮れた！あ、あれ…うん？ふえ？あ～！」

ありすは大失態を起こしていた。

なんと！送つてなかつたはずのメールが送信されていた。

「あつああ～！！やつてもた…でもなんで…？」

実は、携帯を開けたままでいて、ありすの弟・優喜ゆうきがポチポチとボタンを押していたのだ。

## 決心の時【2話】（後書き）

あつす、告りましたね。はい。  
次回もお楽しみに^ ^

## 本当の気持ち

遂に晶に告白メールを送つてしまつたありすは勉強机の前に立ち去りしたまま、10分は居た。

10経ち、「はあああ～どーしょ

と唸りながら（うなりながら）うひちょろし始めた。  
それから5分。

突然、オーディナリー・マーチの音楽が鳴つた。

オーディナリー・マーチは晶だけの着信音だった。  
ありすは動搖し過ぎて「誰やろ…」

といい始めた。

鳴り終わつて、「ちょっと見よかな」といい、携帯を開けた。  
そここの受信ボックスの名前に「仲川晶」と書いてあつた。

## 大事なコト（前書き）

瀬田 信宏

ありすのお父さん。

ありすが小さい時に亡くなっている。

トロンボーン奏者でよく世界を飛んで回っていた。

## 大事なコト

あつすはドキドキしながら、受信ボックスを開けた。  
セツスルと、

(送信者) 仲川晶  
(件名) Re:Re:  
(添付) なし  
(本文)

瀬田の気持ち、受け取った。

今すぐには〇〇できへんから、もうちょっと考えさせて。  
あつがとつ。

と、あつた。

「やつぱ、うちに勝ち田なんてないよな…」

その時、昔、父・信宏(のぶひろ)が言っていた言葉を思い出した。

「あつす？」

「パパ、なあに？」

「もし、あつすに好きな人が出来たら一生懸命に、がむしゃらに頑張つて好きになつてもらいや。パパ、応援してる！」

「うん！頑張る！」

この時は意味も分からず、ただただ頷いていただけだったが、今になつて分かつたような気がする。

こんなありすは慢のいいお父さんを見れたのはこれが最後だった。  
ありすは仏壇の前に立ち、お辞儀をした。

「お父さん、ありすは今、一番の頑張り時やと思つよ。お父さん、あの言葉、覚えてる？お父さんとありすが最後にあつたあの時…。う、一生懸命にがむしゃらに頑張る。」

ありすは仏壇の中に、いや、心の中に居るお父さんとやう話しかけ

た。

## 大事なコト（後書き）

ありすのお父さんはどんな事があつて亡くなつたのでしょうか？  
次回もお楽しみに（・・・）

お父さん、あつがむ【1話】（前書き）

瀬田 美琴

ありすのお母さん。

割とおおらかで天然。優しい。

瀬田 凉

ありすの妹。

2歳。

## 【話題】「父がお父さん、あつがひひ」一年話

あの日から8年。

今日はお父さんの命日であり、海外出張の日だつた。

「美琴、1年帰つて来れないんだだけどありすと涼を守つてやつてくれ。」

「あなた、なるべく早く帰つて来てね。ありすも涼もあなたの事忘れちゃうわよ！」

「分かつた。忘れられないよつて早く帰つてくれよ。」

「ありす？」

「パパ、なあに？」

「もし、ありすに好きな人が出来たら一生懸命に、がむしゃらに頑張つて好きになつてもらいや。パパ、応援してゐる」

「うん！頑張る！」

「涼？」

「なにー」

「涼は頼もしいからママとありすの事よひしへねー！」

「うんー。ぱぱもげんきでかえつてきてねー！」

「うんー！」

## お父さん、あつがいの【一話】（後書き）

あつす、涼、美琴はお父さんを無事に送る事が出来ました。  
さて、これからどうなるんでしょう？

次回もお楽しみに、

## お父さん、あつがとひ「2話」

次の日 。

「昨日、関西空港から16時発の飛行機が墜落しました。死亡者は瀬田信宏さん、…………重傷者は…………です。」

美琴がたまたまテレビを見ていた。美琴は頭が真っ白になつた。

「あの人……」

「ママ、どーしたの?」

ありすの手を涼が握つて美琴の元にやつてきた。

「ううん。何でもないよ

「涙出でるよ」

「あ…………」

そう言いながら美琴は必死に涙を拭つた。

「何があつたの?もしかして、パパの事?ママ、教えてよ」

ありすはすぐに察知した。

「うん。ありすも涼もちゃんと聞いてね。」

「うん」

ありすのしつかりした返答。

「はーい」

涼の何も分かっていない(2歳だった為に何も分からなかつた。)返答。

「実はね…パパ、いなくなつちやつた…」

「ずつといないじやん」

涼は真顔で答えた。

「涼、いなくなつちやつたつてのは……」

「まつて!」

ありすが美琴の発言を止める。

「もついいじやん!まだ涼だつて2歳だよ!今、こんな事、言わなくて後々言えぱいじやない!もうママの泣いた顔、見たくない

よー！」

ありすは自然と涙がぽろぽろこぼれた。

「…………ありす…………ありがとう」

そんな涼も10歳。

もうそろそろこの話をしてもいい年頃だ。ありすは5歳でみんな風になつたのだから、涼も大丈夫だろうと美琴は思った。

お父さん、あつがとひ「2話」（後書き）

つこに涼にも言つ時期が来ましたね！  
このお話を書いていて私も涙が出ました、  
次回もお楽しみに

## お父さん、あつがとひ【語】

「涼。ちょっと来て

ありすと涼は、宿題をしていた。

「はい

美琴は暗い顔をしてた為、ありすはすぐにあの時の事だと思つた。

「涼。よく聞いてね。涼がちつちやいこうからパパいなかつたよね。

「

「うん」

「実はね、パパ、事故で天国にいったんだ…涼はその時2歳だったから覚えてないだろうけどね。」

「ママ。涼、覚えてるよ。パパがいなくなつた全ての事。だから、もう言わないで。」

涼はあるの時、2歳だったのに覚えていた。

「うん。涼、ありがと」

こうしてありす・涼・美琴は、新たな人生を歩む事になる。

お父さん、ありがとひ「3話」（後書き）

ありすも涼も昔から大人びてますね…  
私はどうやら…（涙）

## 思い出したあの事

「今日も頑張ろ～！」ありすはそんな独り事を言いながら登校して  
いた。

晶からの返答が来ない。  
まだ考へているのだろうか？

もう思つていらうちに1か月が経つた。  
まだ、返答は来ない。

「何の事に忘れていたのか？」  
いつそ、自分も忘れてしまおうとしていた。でも、こんな事、忘れ

「うわっつ！！！遅刻するやん！やばい！」近所のお店の時計を見ると、8時10分だつた。

ありすの家から20分はかかるから、急いで学校へ向かつた。

## 大変だったあの時

「ふうー…疲れた……」

ありすは部活から帰つてきて、布団の中に入つた。  
吹奏楽部の割にハードな事をしている学校だから、疲れるのは当たり前だ。

すると、側に置いていた携帯がなつた。

オーディナリー・マーチだつた。

晶だけの着信音だつた。

なんだらつと思いながら受信ボックスの中を見た。

すぐに目に入ったのが、

「ごめん。」

だつた。

こんな事になるのは分かつていただけど、やつぱり辛い。

ありすはすつと立ち去つてしまだつた。

# 新たな旅立ち

あのフラれた日から早くも1年がたつた。

「あります！」

依織が叫びに叫びまくる。

—何—つ—？

いぢ  
その

なんやねんな！！」「したい」とあるんや」「たゞ聞こなやー。」

「世には何もない！」

ほんまたるいじき

「文獻」

卷之二十一

卷之三

あなたを好きになる前の日々の生活に戻れた。

さらに10年後、ありすは運命の人に、いや、愛すべき人に出会うことになる。

## 新たな旅立ち（後書き）

終わりましたね。

というか、私も、ひとりの事情があり、  
連載ストップしちゃうといつ……

すいません（ノ＼＼）

新しく新連載するので見てください（＊＼＼＊）  
では（。。。。＼＼）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7401p/>

---

あなたはあたしのモノ

2011年5月30日21時30分発行